

平山 亮 著

『介護する息子たち：
男性性の死角とケアのジェンダー分析』

(勁草書房、2017年 272頁)

須長 史生



成人男性にとって自ら「息子としての側面」、すなわち誰かの庇護のもとにあたり精神的に依存していることについて言及することはあまりなじみがなく、実際に研究も少ない。しかしそれは実は不思議なことである。男性の多くが息子の経験をしておりそして実は現在もその延長線上に自分が置かれていることを知っていながら、まるでそれはなかったかのように扱われるからだ。著者は冒頭で、成人男性の息子性が等閑視されることに対して疑問を呈し、それに続けて「男性が『息子としての自分』に向き合うことを避けている」ことを指摘する。開始わずか5頁にして読み手の心はわしづかみにされる。

本書は5編の論考に序章と終章を加えた論文集としての体裁をとっている。しかし各章が相互補完的な役割を果たし、さらに序章と終章がそれらの接合関係や理論的帰結を説得的に示しているので一本の体系的な作品として読むこともできる。そこで展開される内容は、息子介護をテーマに介護の現場からセルフヘルプグループ、さらには老親への暴力など多岐にわたる。

最初に展開される息子介護の分析は、主に欧米の先行研究に理論的に依拠して展開される。特にここで重視されるのはジェニファー・メイソンの「感情的活動 (sentiment activity)」の概念である。それはケア (他者の生存や生活を支える活動) が成り立つために必要な感知や思考といった営為のことを指している。たとえば食事介助を行うこととは、ただ単にご飯を食べさせることのみを意味しているのではない (こちらはタスクと呼ばれる)。それは要介護者の年齢、嗜好、生活スタイルなど多くの項目が当事者に即して考慮され、それらを踏まえたさまざまな調整の先に初めて成り立つものなのである。感情的活動とはいわばタスクをケアの水準に高めるための「お膳立て」的な行為なのである。

本書の中でこの概念を用いた分析が際立つのが第五章の息子による要介護状態の母親への暴力の分析である。これまでも介護における息子による老親 (母親) への暴力の指摘はあったが、多くの場合それは男性の暴力性を自明視する文脈で説明されてきた。腕力の強さやコミュニケーション能力の乏しさを根拠に男性の暴力性を説明するものである。これに対し著者は感情的活動の概念を用いて、男性の暴力性が自然のように見えてしまうこと自体の説明を試みる。著者は男らしさの中核的特徴としてしばしば指摘される自立性や自律性を取り上げ、それは“公的領域における男らしさ”であると限定し、“私的領域における男らしさ”の特徴はそれとはまったく異なるもの、すなわち受動性であると指摘する。著者はケア労働には関係調整すなわち他者を理解し意思疎通を図る要素が必要だが、この活動は女性に担ってもらえるため、男性はタスクを実践しているだけであるにも関わらず結果的にケア労働を家族に対して行えているという。それは女性によってお膳立てされて整えられた家族に対して受動的に向き合っているだけであるにもかかわらず、であ

る。したがってそれは「家族の関係性に能動的に働きかけ、変化を生じさせることから『降りる』こと」と同じであると筆者は断じる。さらに著者は男性の暴力を自然と見せるような文脈もこの受動性から説明する。私的領域はその人間関係の近さゆえに感情の表出や抑制が重要となるのだが、ここで著者が指摘するのは感情のコントロールに関する男性的な特徴である。それは「男性は、生じた感情を『何とかする』よりも、感情自体が起きないように努める」というものである。男性的な感情の抑制とは感情を起こさないことをいう。逆にいうとそれは「起こってしまった感情に対しては自分のコントロールが効かない」を意味する。つまり、私的領域では男性にとって母親が関係調整を依存できる唯一の存在なのだが、その母親が要介護状態になってしまうとそれを失ったまま母親との関係に翻弄されることになってしまう。結果、不安と恐れに直面させられた男性は、その感情に「なされるがまま」に、目の前の不可解で反抗的な母親に混乱し「暴発」してしまうのだ。男性と暴力の関係性を単なる「男らしさ」として前提したり、腕力の強さという説得力に乏しい説明に絡み取られることなく、それが自然であるかのように見える仕組みが解き明かされていく。

また著者の理論枠組みは、介護の現場を越えて男性問題に対する分析にも適用力をもつところがその特長であり魅力的な点である。著者は息子介護研究から得られた知見を応用して、既存の男性学を批判の俎上にのせる。そこで著者が強調するのは男性学に見られる「自立と自律のフィクション」への批判的な視点の欠落である。著者は自立と自律への志向性は、実は私的領域における依存を不可欠な要素としたうえで成り立っており、さらにその依存性こそが先の介護暴力のような深刻な男性問題と密接に結びついている、そして男性性は私的領域を切り離すことによってその依存性をなかったことにしながら自立と自律を志向し続けていると考える。だとすると、男らしさの呪縛から自由になることとは、単に自立や自律を相対化することではなく、その前提である自らの依存性を直視し、克服することになるはずである。そしてそれは当然、依存を支える活動を女性に押し付けている現在のジェンダー構造の変革を志向することにもつながる。

これまで男性学は男性自身の問題を分析することを目標の一つとし、実直に男性問題を考察し続けてきた。しかしそこで追求される「自由な男性像」が実は依存を前提としたものであるとするならば、そこから目をそらした分析にどれほどの意味が残るのだろうか。フェミニストが折に触れ提示してきた男性学への疑問やいらだちを著者は自身の研究を経由して明瞭に示してみせる。ここにきて冒頭の著者の問い、すなわち成人男性はなぜ息子の側面を等閑視するのかという問いが再び意味を持つ。依存している自分を見ようとしないうこと、なかったことにして自立や自律の問題と向き合おうとすることの欺瞞性がそこにはこめられているのだ。今、男性学の眼前に意味ある生産的なハードルが浮かび上がった。

※「既存の男性学」などと表現していますがこれらの批判は評者自身にも当てはまることを銘じつつ論じています。

(すなが・ふみお／昭和大学富士吉田教育部准教授)